



Catch!
the entertainment

イベント・ライブ・演劇に映画、
CDリリースから書評に至るまで、
骨太 entertainment を丸飲み!

LIVE

9.12
(Sat)

TAKUYA 38th Birthday Party 打ち上げ!

照れくさいなんて言わないで、
CF! なきあとも、京都をよろしく!

ROBO+SのTAKUYAから編集部コメントが届いた。「昔から自分の誕生日に飲み会とか恋人といるとかがしっくりこなくて、何かしら音楽をして過ごすようにしてるのですが、数年前から友達や後輩達と集ってライブをやるのが恒例になってます」。これが去年までは東京だけだったのが、今年は京都でも二次会的に。レポートはJudy And Mary時代の曲から「普段カラオケでしか披露しない曲(笑)」まで。さらに「3年目で結構暖まってきた」というアメリカザリガニのコントも披露! お土産は実家の「珈琲屋あさぬま」から! 地元っ子感涙である。

本誌で何度も何度も話ってきたミュージックシーンの中で、僕にとってTAKUYAは日本最後のギターヒーローである。決して多弁ではなく、求道的にギターと

向き合う姿は料理人や仏師のような、職人の格好良さがある。

「京都という町で生まれ育った僕の生んだ作品達と、大好きな友人達と照れくさいんですけど里帰りします」。これも何度も話ってきた京都出身ミュージシャンたちによる凱旋イベント、「KMF」や「京都大作戦」や「京都音博」と根は同じだと信じたい。これらのイベントの話になるたび、TAKUYAをもっと京都で観たいと思っていた僕には嬉しい限り(もちろんファンの人もね)。照れくさいとか言わないで、京都ミュージックシーンを本誌の分まで託したい(まあ身勝手なことでご迷惑かもしれないが…)。ま、その願いが一つ叶うことで、3時間半(+α?)の超ロングセットは純粋に楽しみだ。(竹中 聡)

- 「TAKUYA 38th Birthday Party 打ち上げ!」
- 9.12 (Sat)
- OPEN 16:30 / START 17:30
- 出演: TAKUYA (Vo. & G.)・五十嵐公太 (Dr.)
GAKU (G.)・坂巻晋 (B.)・nishi-ken (Key.)
- ゲスト: ムッシュカマやつ・SHOGO (175R)・MCU (写真右下)
後藤まりこ (ミドリ)・アメリカザリガニ (写真右上)
and more!
- 全席自由 8500円 (3ドリンク・スペシャルギフト付)
- チケットぴあ ☎0570-02-9999 (Pコード:328-014)
- ローソンチケット ☎0570-084-005 (Lコード:59618)
- イープラス <http://eplus.jp>
- ROBO+S <http://www.robots-web.com>
- 京都MUSE
京都市下京区四条通柳馬場西入ル ミューズ389京都
☎075-223-0389
<http://www.arm-live.com/muse/kyoto/>
- 問い合わせ ☎06-6357-3666 (清水音楽)

京都CF!が休刊するという事を耳にしたときに、具体的にどうのという話とは別に、都市というものが紡ぐことの出来る「物語」の喪失を感じ、頭がぐらぐらした。やっぱり、「枕草子」や、「水左記」や「年中行事絵巻」みたいなものが残っていることよって、我々は歴史教科書やユニセフとかいう団体に踊らされているだけの世界遺産などという題目とは全く別個のフレームワークで、京都という街のアホらしさやそこいら人間の魅力に(時代を超えて今でも)触れることが出来るのだ。建築や宗教行為はそりゃ歴史を語れるかもしれないし、その思想的な意味において人間の精神史に大きな影響を与えている、というの分かる。が、しかし風俗を伝えようとする「粋」なものには紙に残されてしかるべきである、とするならば現代の「こちよげなるもの」(枕草子)を伝えるというか残していく紙媒体は、一旦その役目を終えるのだろうか。

僕は、機会があれば「ケータイがなかった時代のフォークロア」という言い方で、街のあり様を書いてきた。それは、こういった情報誌の類において、単純に〇〇が好きだという趣味性だけでなく、地域性というか、現場でのコミットがいかに大事か?という事を自らの言葉のよりどころにしてきたからである。こういった…と書いたが、それはエリア情報誌の事であり、その場で生きているということがいかなるリアリティを持っているのか?との問答であり、それが他者と自分を規定する言語としての身体の分節作業であった。

【第22回】
何ものにも寿命というものはある。
が、しかし、街場の気分を、
誰かが伝えていかないといけない。
それは決して、「自分」軸でしか語れない
ネットメディアのすることではない。

肩の力を抜いて、自由に語るうさぎ、
京の街と付き合うということ。

街場の演算

袖岡保之
(そでおかやまゆき)

京都音楽博覧会 2009 IN 梅小路公園

EVENT

9.22
(Tue)

ちよっくら街まで、フェスに行こう。 くるりの仕掛ける京都音博、開幕!

今の時代における京都音楽の代名詞＝くるりを発起人とし、京都駅から西に徒歩15分、という街なかで開催される音楽フェス「京都音楽博覧会」が今年も決定した。第一回、二回は、アイルランドやルーマニア、スウェーデン、ナイジェリア、オーストラリアといった非主流圏から、一般的には名の知られていないミュージシャンたちを多く招いていたが、今回はベン・クウェラーを除く6組が日本勢となるのは変化した点だろう。

もちろん出演者は皆、一家言ある百戦錬磨たちばかりで、でもやっぱり注目しちゃうのは演歌界からの参戦、石川さゆり!! これは衝撃だ。くるり自身もこの6月に8thアルバム「魂のゆくえ」を発表し、サポートドラマーに54-71のboboを迎えたタイトな3ピースも絶好調。初秋の季節、ゆる～い雰囲気なかで行われる京都音博に、ゆるりと足を運んでみては?

(中谷琢弥)

- 「京都音楽博覧会2009 IN 梅小路公園」
- 9.22 (Tue) ※雨天決行・荒天中止 ■OPEN 10:30/START 12:00 ■前売り8800円
- 京都梅小路公園・芝生広場 <http://www.kyotoonpaku.net/>
- 問い合わせ：京都音楽博覧会事務局 ☎0180・99・6611 (携帯用、24時間テープ対応)
- 出演：くるり、石川さゆり、奥田民生、ふちがみとふなと、矢野顯子、Ben Kweller、BO GUMBO3 feat. ラキタ



山水人 2009

滋賀の山奥に「村」が出現する。 音楽を中心とした祭りが始まる。

EVENT

8.29 ~
(Sat)

今年も山水人(やまうと)という「村」が、滋賀の山奥、ブナ原生林の麓に現れる。それは、すべてに参加すると2週間以上となる滞在型イベント? お祭り? であり、会場となる「村」を開き、つくるところから始まる。ここではDJ&ライブといった音楽を中心に、日によって社会や環境についての講演やバイオ燃料などのワークショップ、「電気の無い日」や「お金の無い日」といった試みまで、さまざまな催しが行われる。週末だけ参加のでもアリだから、ここまで辿り着いてみてほ

しい。トラベラーやヒッピーな人たちとの交流も楽しいはず。

村開きは、もはや恒例となったゴア・トランスの第一人者、スピリチュアル仙人DJ、ゴア・ギルの20時間を越えるDJプレイで。全身をもって音楽の、大自然のエネルギーを感じて、他者との繋がりを感じて、体内宇宙を感じて…。その後は、自分で考えな。

(中谷琢弥)



- 「山水人2009 ～ともに学び 語り 踊り 笑い、感じよう～」
- 8.29 (Sat) ~9.14 (Mon)
- ~8.29 (Sat) ~30 (Sun) : 前売り7000円 当日9000円/9.5 (Sat) ~9.14 (Mon) :6900円 9.5~10の期間4900円 9/7~14の期間5800円
- 滋賀県高島市朽木生杉 山水人エコビレッジ <http://iyamauto.jp/>
- 出演：Goa Gil、SOFT、サヨコオトナラ、イーリヤダスタルターガス、AUX、マジェスティックサーカス、DACHAMBO、せいかつサーカス、他

「ケイタイがなかった時代のフォークロア」というのは、「ケータイがある時代」だからこそ、の開かれたコミュニケーション・メディアがどうあるべきなのか? という自問でもあったのだ。そう、決して物事を語る枕としてあるものではなく。

サブカルチャーという文脈の元にメインカルチャー(というものが存在しなくなった世の中だからこそ)を包括的に規定しようという流れの中に、哲学も批評もある。そんな時代にミニコミ的なものが機能しないというもお笑いな感じがするが、自由や生活や始まりを意味する大文字のLを名に冠した雑誌や、リージョナルと言いつつしましう雑誌、そして有名無名関係なしにという階級を超えた街的な「なんやわからんけど、コレ、ココ、コイツって面白いな」という雑誌に20年も関わってきた(これた?)。ことに感謝する。とともに、これから京都の街はどうなってしまうのだろうか? と、ふと考えてしまふ。

きつとそんなことなど全く気にすることなく街はどんどん姿を変えながら、様々な物語を産み出していくのだろう。そう「デイズー」の「砂漠は生きている」のように、京の「街は生きている」のだ。そう、終焉どころか、あの手この手で街は時代の気分をつくり出す。BALBILの看板にURLが書いてあるように!

とはいえ、ネットメディアやフリーペーパーは、何かあったときに街場の気分を背負って立つ勇氣があるのだろうか? 僕はそこだけがこれからの心配だ。何も論壇誌が必要だと言っているわけではない。O-157が騒がれたときに真っ先に焼肉特集をやったり、地震だと言えば神戸特集を組んだりしたその脳天気でありながらも倫理へと繋がる道筋をつくれるかどうか? が街とコミットメントするメディアが期待される、最も大きな部分だと思ふ。

メトロで'90年代にアジアナイトを展開していた大御所DJ天宮志龍が正月に亡くなったかと思えば、三沢光晴やマイケル・ジャクソンとともに京都賞のピナ・パウシュが亡くなった。エスクアア日本版に続いてスタジオ・ヴォイスも休刊だそうだ。「えっ? CFも休刊!」「しかもライメンでしめるって!」うーん、それが一番問題だ。

袖岡保之 / コピーライター&編集者、エルマガジ、ミーツ・リジョナルの副編集長、関西どっとコムWEB編集部長、京都CF1スーパーヴァイザーを経て現在京滋を中心に広告制作に携わる。編集者としての視点と、京都の祭りのフィールドワーク、そして街場のコミットメントをいかに言葉やビジュアルに還元するか、がライフワークである。最近では保伊戸(青(はいと よい)のペンネームのほうが通りがいい?)